

春光院に所在する来待石製石塔群について

1. 春光院について

京都府右京区花園妙心寺町に所在する春光院は、天正18年（1590）の創建と伝えられる臨済宗妙心寺の塔頭寺院である。寺伝には、開山は碧潭玕禪師と伝えられている。関ヶ原の戦いの後に出雲・隠岐の領主となる堀尾吉晴には、堀尾金助という男子があり、金助は豊臣秀吉による小田原攻め（天正18年）の時に、陣中で病没したとされる。吉晴は息子の菩提を弔うために妙心寺に俊巖院を創建し、この俊巖院が後に改称して春光院となっている。

このような経緯で創建された俊巖院（春光院）は、堀尾家の菩提寺であり、出雲に出国して以降も、吉晴をはじめとする一族から厚い尊崇を受けたと考えられる。俊巖院（春光院）に所蔵されていた堀尾忠晴書状に、忠晴の母（忠氏妻長松院）の菩提を弔ったことへの謝意が述べられていることから、そのことが窺える。

春光院への改称の時期は、所蔵の「春光院古今院事記」（享保7年〔1722成立〕）により、寛永12年（1635）7月より同13年7月までの間に行われたものとされ、時期的には、寛永10年（1633）の堀尾家断絶が一つの契機になったと思われる。

なお、臨済宗妙心寺派は、吉晴が春龍玄済（妙心寺百一世で、吉晴に招かれ遠州浜松の天徳寺から出雲に赴いたとされ、瑞応寺〔現天倫寺：松江市〕、圓成寺〔松江市〕の開山となる）に皈依したように、堀尾家の厚い尊崇を受けていた。また、吉晴は慶長10年（1605）に妙心寺の「城宜軒」の相続問題に関与したことが西笑承兌・閑室元佶連署書状（「西笑和尚文案 第八冊」『相国寺蔵西笑和尚文案』所収406号文書）から確認でき、俊巖院の創建にとどまらない関係を妙心寺ともっていた。

堀尾家が忠晴の死をもって断絶して以降の春光院は、忠晴の娘が石川廉勝（膳所藩主石川忠総の長男。慶安3年（1650）に忠総に先立ったため、後に長男憲之〔忠晴の孫〕が藩主を継ぐ）の室となっていた関係から、石川家の保護を受けた。石川家は春光院を厚く保護しており、春光院は石川家より、初め五十石、後に二十石加増の七十石の寺領の寄進を受けている。これについては、堀尾

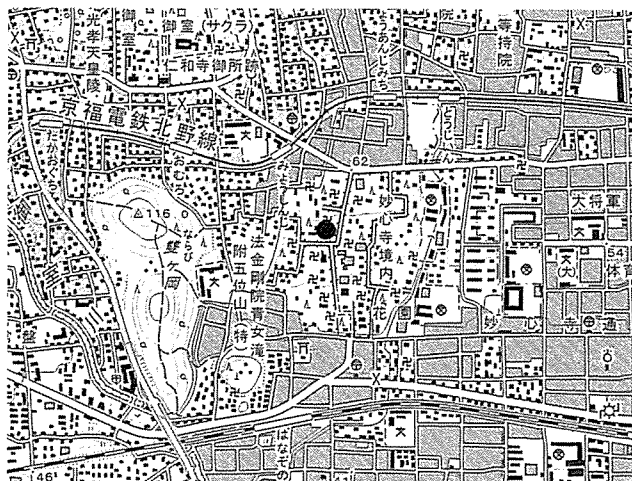


図1 妙心寺春光院位置図（1/25,000）



妙心寺春光院（正門側より庫裏〔右〕を望む）

家から五十石の寄進を受けていたとする記述が「春光院古今院事記」に存在し、また、圓成寺や春光院に伝えられている堀尾家の「給帳」には、妙心寺に対して五十石の寄進を行っていることが記載されているので、堀尾家の寄進が石川家に引き継がれ、更に加増されて保護されたと考えられる。春光院は石川家の菩提寺としての役割も果たし、墓所には堀尾家の墓石類の他、石川家の墓石類も残されている。

2. 来待石製石塔の配置と人物比定について

春光院本堂裏の墓域には、堀尾家・石川家などの位牌及び堀尾家嫡流の木像を納めた御霊屋と、供養塔或いは墓碑などの石塔群が残されている。この石塔群の中に、松江市宍道町来待地区で産する来待石（凝灰質砂岩）製の石塔が存在し、堀尾泰晴夫妻石廟内の宝篋印塔2基を含めた宝篋印塔10基のほか、五輪塔1基、無縫塔1基、舟形石塔1基が確認できる。堀尾泰晴夫妻のものとした石廟内の宝篋印塔1基（正面右）には「天徳寺□□□」「世崇□□□」の文字が刻まれており、泰晴の戒名が「天徳寺殿高菴世崇大居士」であることから、この石廟が堀尾泰晴夫妻のものであると特定できた。他の来待石製石塔については、人物を特定できる銘文等は確認できなかったが、春光院には石塔の被葬者・供養者を記した石塔配置図^(注1)と墓石表が残されており、これに基づいて、伝わる人物名を石塔名に付し、併せて石塔番号を記すこととした（図2：以下、人物名を付して呼ぶ）。

来待石製石塔の配置は、御霊屋の真裏に堀尾泰晴夫妻石廟があり、正面向かって右側に2基の宝篋印塔（伝堀尾吉晴夫妻宝篋印塔）、左側に大小2基の宝篋印塔（伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔）、伝堀尾忠氏石塔の左通路を挟んで東向きに2基の宝篋印塔（伝奥平家昌夫妻宝篋印塔）が配されている。五輪塔1基（伝野々村河内妻〔勝山：堀尾勘解由母〕五輪塔）は伝忠氏夫妻宝篋印塔の北に並んだ石塔列の中に、無縫塔1基（伝堀尾忠晴無縫塔）、舟形石塔1基（伝松村監物舟形石塔）は泰晴夫妻石廟のやや離れた右奥に配されている。なお、伝奥平家昌夫妻宝篋印塔横とその北石塔列中で伝野々村河内妻五輪塔近くに、相輪を欠く高さ60cmほどの宝篋印塔が2基あるが[12、13号石塔]、いずれも人物比定はなされていない^(注2)。

『春光院古今院事記』には、石川家の

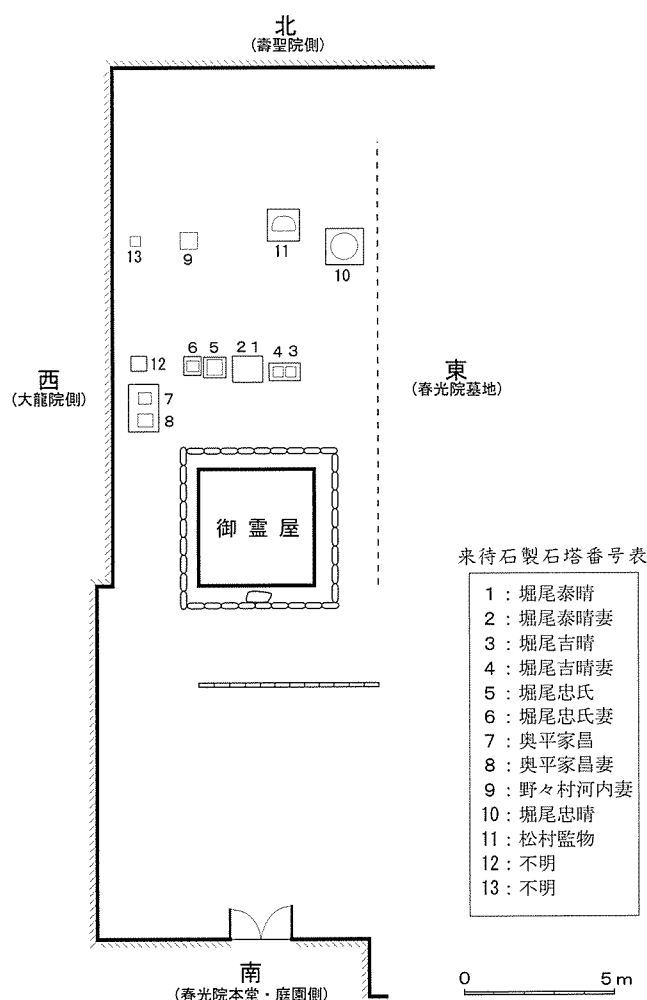


図2 石塔配置図

命を受けた石川家家臣が出雲より堀尾家の木像とともに「石碑」を移したことが伝えられており、石塔の一部は、堀尾家断絶後に出雲より移送された可能性もある。

注1 石塔配置図は4枚残されており、3枚は現在の来待石石塔の配置と一致する。しかし、他の1枚は現在の配置と異なる記載で、寺伝によれば、元々、堀尾泰晴夫妻石廟、6基の宝篋印塔（堀尾吉晴夫妻石塔、堀尾忠氏夫妻石塔、奥平家昌夫妻石塔）は、現在墓域の北端にある石川家墓所の更に北奥にあり、境内地の改修により現在の位置に移されたとのことで、移設前の配置図と推定される。

注2 「堀尾古記」（『新修島根県史』史料編2 島根県 1965）には、慶長13年「堀尾勘解由果ル 極（12）月五日京ニテ」と記されており、月山富田城跡（安来市広瀬町富田）麓にある親子観音内宝篋印塔には、「慶長十三年」「十二月五」の紀年銘と、「桂ヶ口院殿祥雲世口大居士」の戒名が刻まれている（松江石造物研究会「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景」『来待ストーン研究』7 2006）。今回の調査により確認できた「春光院三時回向（本書収録）」に、「桂岩院殿祥雲世端大居士 慶長十三十二月五日」という戒名・没年の記録が残されていることから、「桂岩院殿祥雲世端大居士」とは、堀尾勘解由の戒名であると判断でき、同じ戒名を刻む親子観音内宝篋印塔は勘解由のものと特定できる。「堀尾古記」は勘解由の果てたのが京のどこで、どのような果て方だったかは伝えていないが、堀尾家お家騒動の責めを受ける形で、京都の何処かで（或いは春光院で）勘解由が亡くなり、亡骸は堀尾家菩提所春光院に葬られた可能性が考えられる。そして、月山の麓には堀尾一族である勘解由の供養などのために親子観音が造立されたのであろう。寺伝にも人物比定のなされていない小型の宝篋印塔の一つは、お家騒動に巻き込まれ、非業の死を遂げた若き勘解由の石塔（墓）なのであろうか。勘解由の母である野々村河内妻（勝山）のものと伝えられる五輪塔が春光院に残るのは何を伝えているのだろうか。

3. 笏谷石製石廟と来待石製石塔

(1) 堀尾泰晴夫妻石廟

堀尾泰晴夫妻石廟は笏谷石製の石廟で^(注1)、石材を極めて精巧に加工し、組み合わせている。高さ147.2cm、横幅〔屋根棟石〕150.8cm〔本体〕101cm、縦幅〔屋根〕112cm〔本体〕83.2cmの平入りの屋形形で、台石の上に石廟本体、屋根を載せ、正面には装飾をもつ観音開きの扉が付く。

屋根は前後2枚の石材を用いて切妻造りに造られ、棟には断面五角形に整えた2枚からなる棟石を載せ屋根を固定している（棟石は接続部分で上下に組み継いでいる）。棟石の断面は高さ12cm、下幅12cm、棟の両端には左三つ巴紋が刻まれている。屋根の軒先は直線的に厚さ6.2cm、両端は厚さ9.2cmで、緩やかに立ち上がるよう表現されている。

石廟本体は、壁面に前壁（正面両脇）、側壁、奥壁を構成するために6枚の切石を用い、正面に観音開きの2枚の扉石（現在、左の1枚は失われている）と、扉石の軸受を造り付けた上下2枚の切石羽目板をかませ込んでいる。現存する扉は正面右側のもので、高さ60cm、幅38cm、厚さ4cm、表面には上部に天蓋と瓔珞、中央に月輪と梵字、下部に蓮華座、裏面には上部に半肉彫りの日輪と雲流、中央に蓮を2本（茎、蕾、葉）、下部に蓮池（流水）が彫り込まれている。扉右端は半円柱状に整形され、上下には軸となる直径3.4cm、高さ3.2cmの突起が付く。扉左端には失われた左扉を押さえる幅8cmの石板の羽目板が造り付けられている。扉の上下の切石は複雑に加工され、扉の軸受け部分は本体より4cmほど外に突き出している。扉下の切石羽目板の正面中央には幅8cmの突帯があり、その両側には縦連子と格狭間を組み合わせた図柄を彫る。本体の壁面は6枚の切石からなるが、前壁から側壁にかけて平断面L字状に左右1枚ずつ、側壁から奥壁にかけて左右1枚ずつ、奥壁には2枚を用いている。外側壁面には卒塔婆形に配した四十九院が陰刻されている（表1）。

台石は、直方体の石を9個組み合わせて平面□形とし、その上に石廟本体を載せている。平面□形の台石の内側には一枚の板石をはめ込み、石廟の床面とし、その上に2基の宝篋印塔を載せる。

堀尾泰晴夫妻石廟の形態や装飾は、親子観音〔安来市広瀬町〕、堀尾民部（推定）石塔〔松江市玉湯町〕、殿様墓〔雲南市三刀屋町：石龕（石廟）が左右2基並ぶ〕など、堀尾氏の上級家臣に採用されたと考えられる来待石製大型石龕（石廟）と類似する（注2）。

堀尾泰晴宝篋印塔〔1号石塔〕

石廟内の正面右側に納められている。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎まで総高は111.5cmである。石廟内の右側に納められており、基礎部は一部風化している。

相輪の高さは40cm、頂部はやや扁平な球状となっている。上部請花は輪状に加工され、径17.5cmで、文様はない。九輪は狭い凹状の線で表され、最高部径19.5cm、最下部径19cmである。下部の請

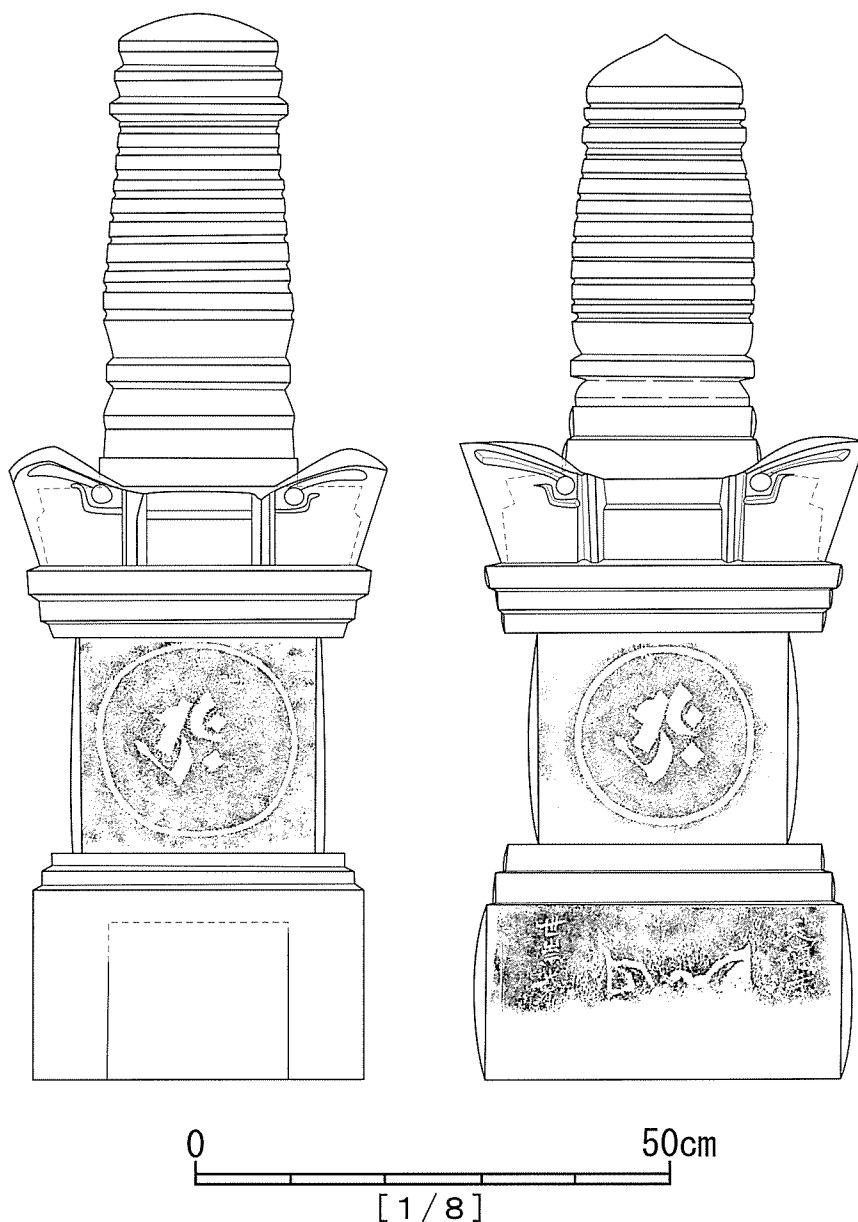


図3 堀尾泰晴妻宝篋印塔実測図

図4 堀尾泰晴宝篋印塔実測図

花は楕形に加工され、文様は認められない。伏鉢は最大径19cmである。

笠の高さは24cm、上端部幅19cm、軒幅38cm、下端部幅33.5cmである。軒上、軒下とも2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りの縁には、蕨手の文様が彫られている。

塔身は直方体であり、高さ22.5cm、上端部幅26.5cm、下端部幅26.5cmで、中央部が少し膨らむ。正面中央部には月輪の中に、薬研彫りの梵字が刻まれている。

基礎は上部二段で、高さ25cm、上端部幅33.5cm、下端部幅38cmである。正面には凹状に段が作られ、その中央に蓮座が彫り込まれている。しかし、表面が風化し、文様は不明瞭になっている。また、左右の端部には戒名が彫られており、右側には「天徳寺□□□」、左側には「世崇□□□」の文字が認められる。堀尾泰晴の戒名が「天徳寺殿高菴世崇大居士」であることから、この宝篋印塔が泰晴のものであることが判明した。

堀尾泰晴妻宝篋印塔〔2号石塔〕

石廟内の正面左側に納められている。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎までの総高は113cmである。石廟内の左側に納められており、石廟の左扉が失われていたためか、基礎部はかなり風化している。

相輪の高さは44.5cm、頂部はやや扁平な球状となっている。上部の請花は輪状に加工され、径18cmで、文様はない。九輪は狭い凹状の線で表され、最高部径17cm、最下部径20cmである。下部の請花は碗状に加工され、文様は認められない。伏鉢は最大径20cmである。

笠の高さは21cm、上端部幅20cm、軒幅37cm、下端部幅30.5cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りの縁には、やや簡略された蕨手の文様が彫られている。

塔身は直方体であり、高さ23cm、上端部幅25cm、下端部幅25cmで、中央部が少し膨らむ。四面中央部には月輪の中に、薬研彫りの梵字が刻まれている。

基礎は上部二段で、高さ24.5cm、上端部幅31cm、下端部幅35cmである。正面には幅19cm、高さ約15cmの大きさで凹状に段が正方形に作られ、その中央に表面が風化し不明瞭であるが、蓮座と思われる文様が彫り込まれている。また、左右の端部には戒名が彫られていたようだが、現在では左側の下部に「姉（大姉か）」の偏と考えられる「女」の字が認められるのみである。

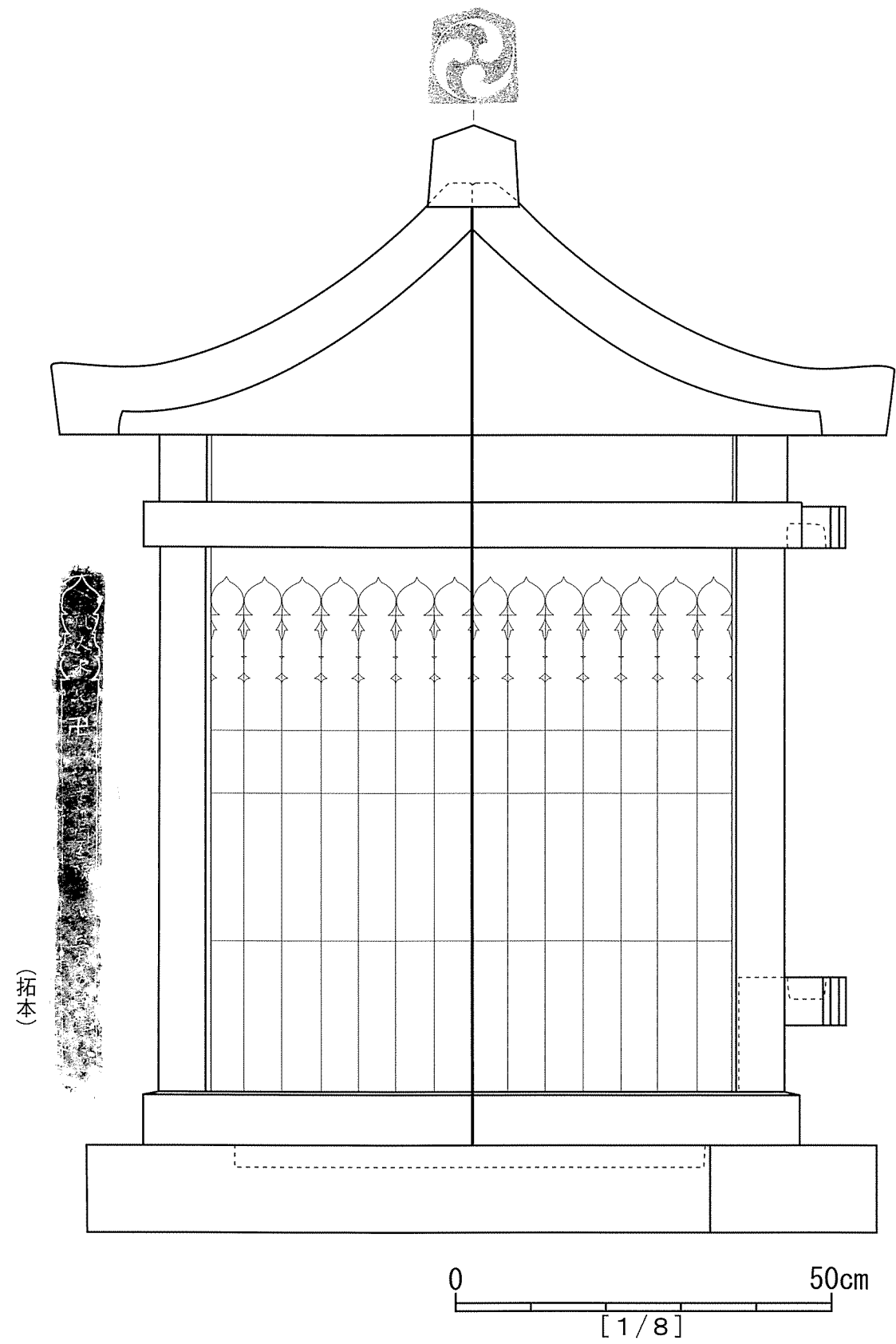


図5 堀尾泰晴夫妻石廟（側面）実測図

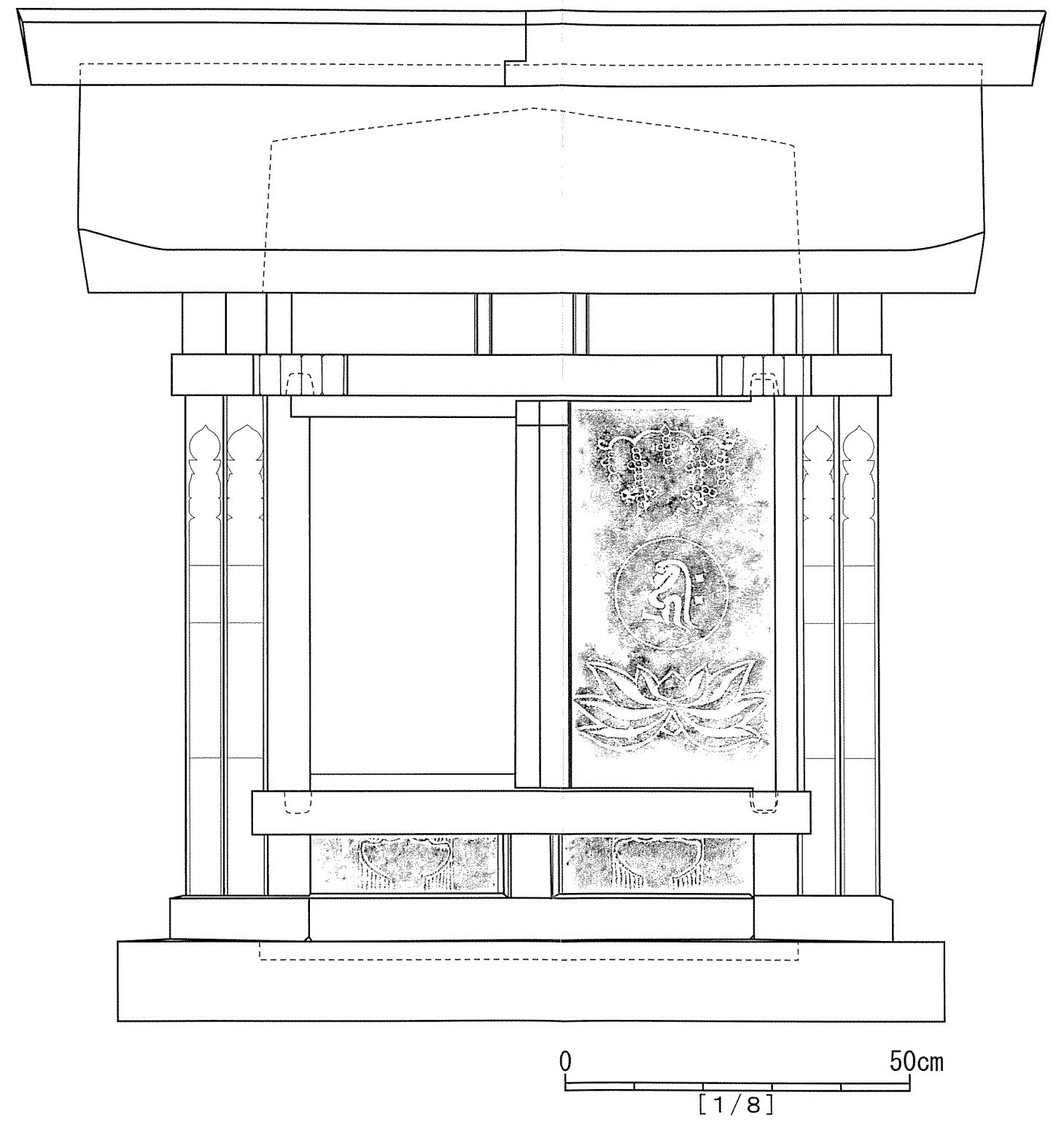


図6 堀尾泰晴夫妻石廟（正面）実測図



堀尾泰晴夫妻石廟正面（閉扉）〔石廟の左：伝堀尾忠氏宝篋印塔、石廟の右：伝堀尾吉晴妻宝篋印塔〕

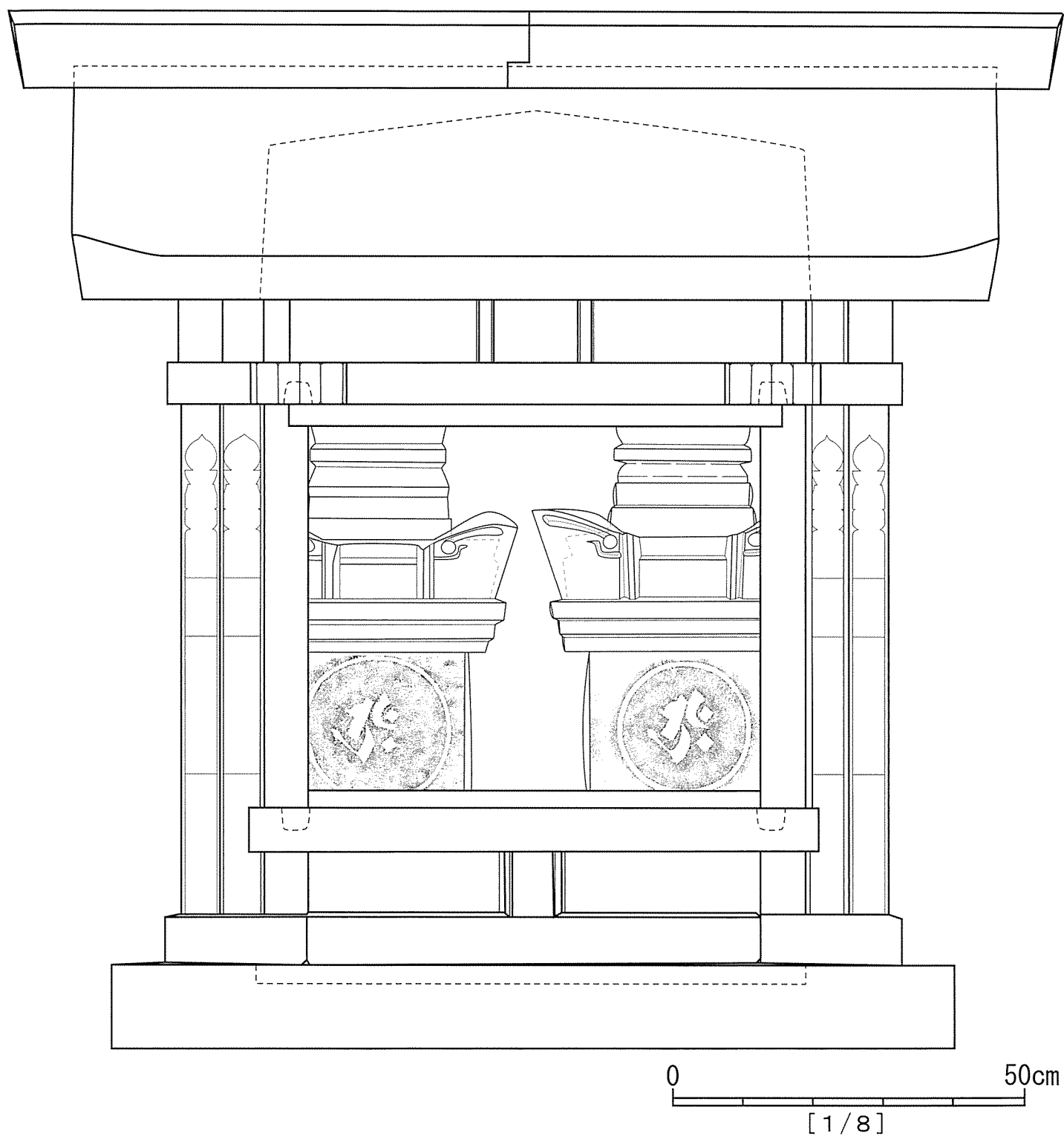


图7 堀尾泰晴夫妻石廟、宝篋印塔（正面）実測図

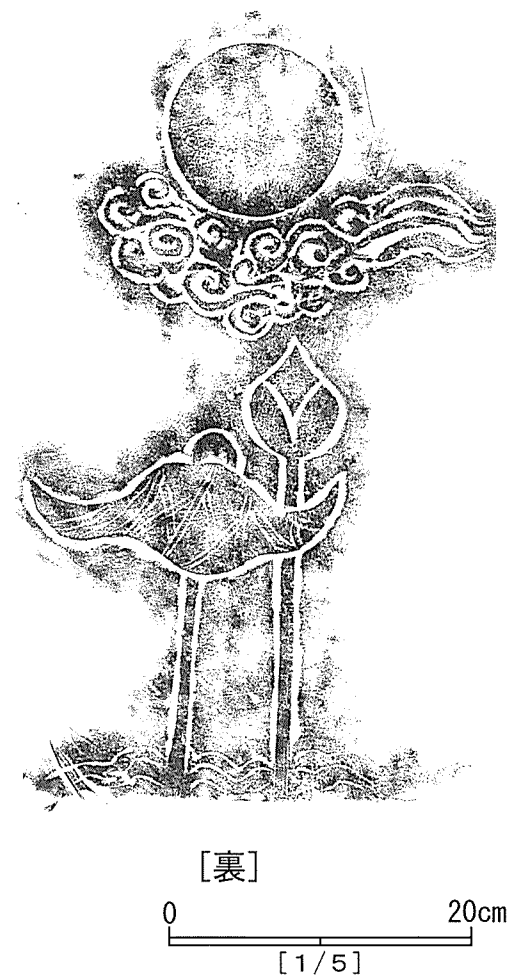
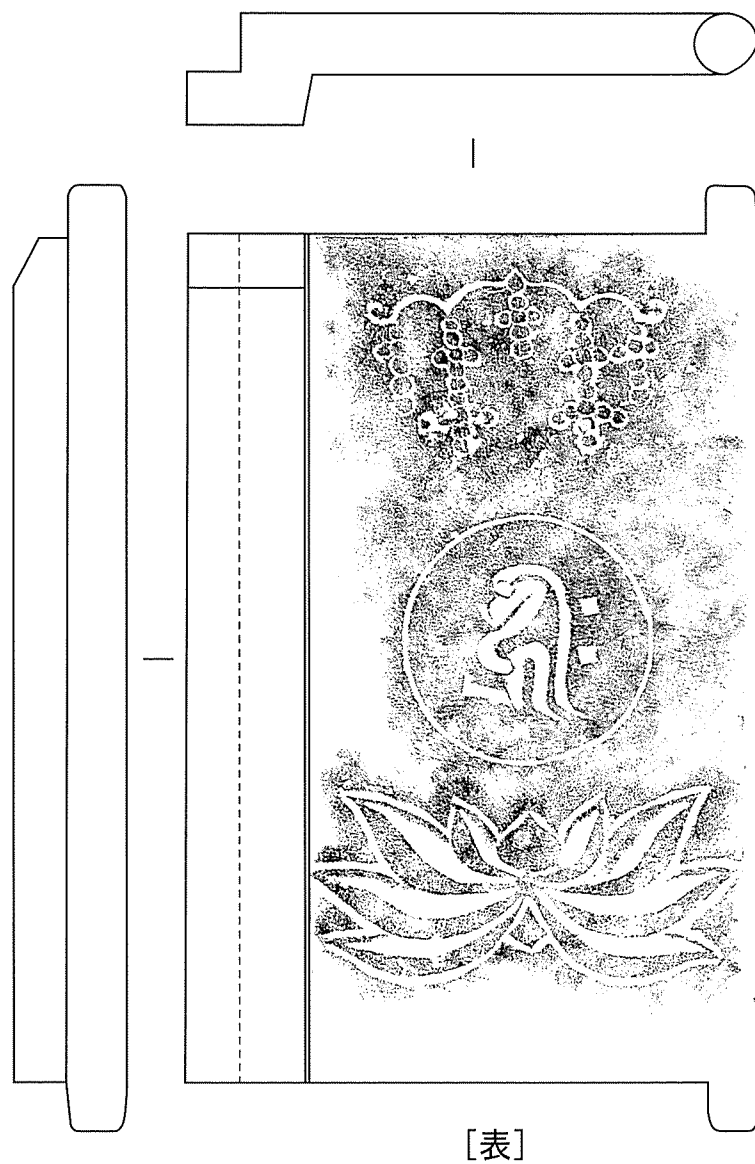


図8 堀尾泰晴夫妻石廟前扉実測図・拓本（左：表、右：裏）

表1 堀尾泰晴夫妻石廟外壁卒塔婆内四十九院判読表

〔正面（南面）扉左の右側から〕			〔右面（東面）右側から〕		
①	空風火水地 卍 恒説華嚴院	盧遮那佛如来	③④	空風火水地 卍 造像図盡院	修補佛眼像
②	空風火水地 卍 守護国土院	五大力菩薩	③⑤	空風火水地 卍 安養浄土院	阿弥陀如来
〔左面（西面）右側から〕			③⑥	空風火水地 卍 理正天王院	炎魔天王
③	空風火水地 卍 覆護衆生院	佛眼口菩薩	③⑦	空風火水地 卍 檀度利益院	檀波羅蜜菩薩
④	空風火水地 卍 般若不断院	般若力菩薩	③⑧	空風火水地 卍 因明習学院	竜樹王菩薩
⑤	空風火水地 卍 念佛三昧院	大勢至菩薩	③⑨	空風火水地 卍 觀虚空藏院	虚空藏菩薩
⑥	空風火水地 卍 彼但三昧院	轉法輪菩薩	④⑩	空風火水地 卍 招提救護院	魔訶迦葉像
⑦	空風火水地 卍 修習慈悲院	多羅尊菩薩	④⑪	空風火水地 卍 唯學傳法院	諸經諸輪蔵
⑧	空風火水地 卍 常念七佛院	過去七佛	④②	空風火水地 卍 供養三宝院 ^{注3}	金剛菩薩
⑨	空風火水地 卍 鎮護方等院	佛頂尊勝像	④③	空風火水地 卍 劳他修福院	寶頭盧尊像
⑩	空風火水地 卍 常念常樂院	釋迦涅槃像	④④	空風火水地 卍 不二浄名院	維摩居士像
⑪	空風火水地 卍 少欲知足院	戒波羅蜜力菩薩	④⑤	空風火水地 卍 常行律儀院	釈迦説法像
⑫	空風火水地 卍 毘沙門天之院 ^{注1}	曳沙門天之像	④⑥	空風火水地 卍 常行如意院	禪波羅蜜菩薩力
⑬	空風火水地 卍 地藏十輪院	地藏菩薩像	④⑦	空風火水地 卍 常念惣持院	五大明王
⑭	空風火水地 卍 常念普賢院	普見菩薩蔵	〔正面右側右から〕		
⑮	空風火水地 卍 精進修行院	精進波羅蜜力之蔵	④⑧	空風火水地 卍 理觀藥師院	藥師如来
⑯	空風火水地 卍 常念不動院	阿閼如来之像	④⑨	空風火水地 卍 伴行衆生院	金剛力士菩薩
〔背面（北面）右側から〕			※□は判読不明箇所。		
⑰	空風火水地 卍 恒修力菩提院	善財童子知識之像	参考文献		
⑱	空風火水地 卍 三説真実院	善見尊之像	徳山暉純『梵字四十九院・五大・心経』木耳社		
⑲	空風火水地 卍 展明十惡院	世親菩薩力	一九九二年		
⑳	空風火水地 卍 如来密蔵院	大盧遮那如来力	注		
㉑	空風火水地 卍 金剛道場院 ^{注2}	金剛手菩薩力			
㉒	空風火水地 卍 説法利他院	釋迦説法像			
㉓	空風火水地 卍 常行説因院	文殊師利□像			
㉔	空風火水地 卍 金剛修法院	大日如来像	参考文献		
㉕	空風火水地 卍 法華三昧院	釈迦多宝像			
㉖	空風火水地 卍 恒念観音院	六観音像	（注1）参考文献『梵字四十九院・五大・心経』によれば、院名は「多聞天王院」とある。		
㉗	空風火水地 卍 求聞持蔵院	海阿難之像			
㉘	空風火水地 卍 梵釈四王印	梵天帝釈四天王	（注2）前掲『梵字四十九院・五大・心経』によれば、院名は「灌頂道場院」とある。		
㉙	空風火水地 卍 弥勒法相院	弥勒菩薩像力			
㉚	空風火水地 卍 施藥悲田院力	藥王菩薩力	（注3）42番から49番までの配列順は、参考文献に見られるような通常の四十九院配列順とは異なっている。		
㉛	空風火水地 卍 金剛吉祥院	吉祥大菩薩			
㉜	空風火水地 卍 念観文殊院力	文殊師利菩薩			
㉝	空風火水地 卍 平等忍辱院	忍辱波羅蜜之□			

(2) 伝堀尾吉晴夫妻宝篋印塔

伝堀尾吉晴宝篋印塔〔3号石塔〕

堀尾泰晴夫妻石廟の東隣（正面右）に位置する2基の宝篋印塔のうち、東側（正面右側）のものである。春光院の記録により、堀尾吉晴のものとした。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎までの総高は120cm、全体的に風化が進んでいる。台石は花崗岩製で、高さ14cm、幅54cmである。

相輪の高さは39.5cm、頂部はやや扁平な球状となっている。上部の請花は輪状に加工され、径17.5cmで、文様はない。風化は進んでいるが、九輪は狭い凹状の線で表され、最高部径約15cm、最下部径18cmである。下部の請花も輪状に加工され、文様は認められない。伏鉢は高さ4.5cm、最大径18cmである。

笠の高さは25.5cm、上端部幅20cm、軒幅39cm、下端部幅35cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、

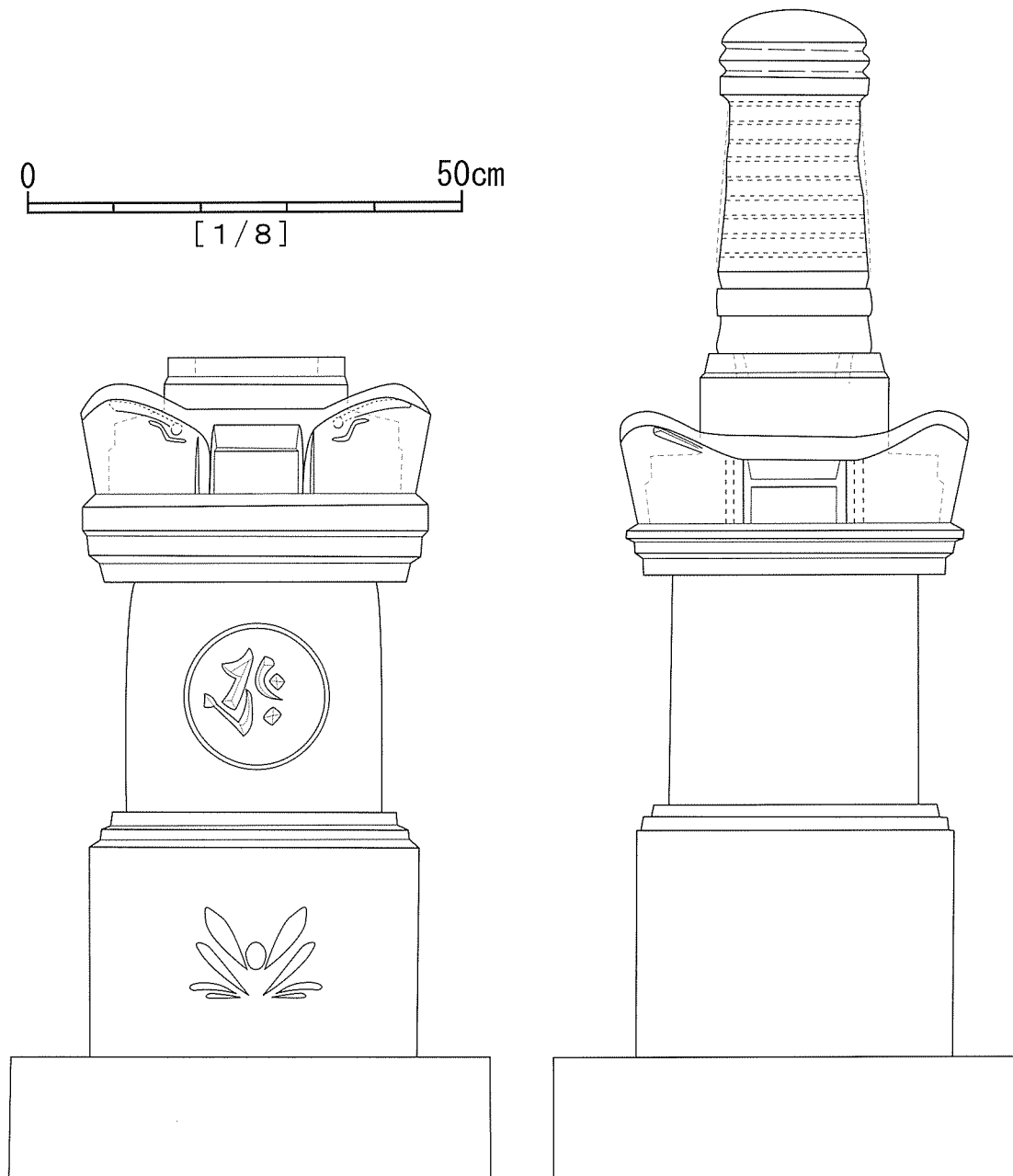


図9 伝堀尾吉晴夫妻宝篋印塔実測図

図10 伝堀尾吉晴宝篋印塔実測図

隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りには、やや簡略された蕨手の文様が彫られているが、風化のため詳細は分からない。

塔身は直方体であり、高さ26cm、上端部幅28.5cm、下端部幅29cmである。風化が進んでいるためか、四面に梵字は認められない。

基礎は上部二段で、高さ29cm、上端部幅33cm、下端部幅36.5cmである。

伝堀尾吉晴妻宝篋印塔〔4号石塔〕

堀尾泰晴夫妻石廟の東隣（正面右）に位置する2基の宝篋印塔のうち、西側（正面左側）のものである。春光院の記録により、堀尾吉晴妻のものとした。来待石製の宝篋印塔で、相輪の風化が著しく、総高は分からない。笠から基礎までの高さは、80.5cmである。台石は花崗岩製で高さ14cm、幅53cmである。

相輪は先端の宝珠部分の残欠を置いているが、詳細は不明である。

笠の高さは26cm、上端部幅20.5cm、軒幅40cm、下端部幅35cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りには、やや簡略化された蕨手の文様が彫られている。

塔身は直方体であり、高さ26.5cm、上端部幅29cm、下端部幅29.5cmである。四面の中央部には月輪の中に、薬研彫りの梵字が刻まれている。

基礎は上部二段で、高さ28cm、上端部幅33cm、下端部幅37.5cmである。正面の中央に蓮座が彫り込まれているが、表面が風化し、不明瞭になっている。

(3) 伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔

伝堀尾忠氏宝篋印塔〔5号石塔〕

堀尾泰晴夫妻石廟の西隣（正面左）に位置する2基の宝篋印塔のうち、東側（正面右側）のものである。春光院の記録により、堀尾忠氏のものとした。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎までの総高は182.5cm、全体的に風化が進んでいる。台石は来待石製で高さ14.0cm、幅77cmである。台石の上端は大きく面取りしてあり、蓮弁が四方の面取り部分に線刻されている。

相輪の高さは82.5cm、頂部はやや扁平な球状となっている。上部の請花は輪状に加工され、径23.5cmで、文様はない。九輪は狭い凹状の線で表されている。下部の請花は風化が進んでいるが、輪状に加工され、文様は認められない。伏鉢は高さ6.5cm、最大径25.5cmである。

笠の高さは33.5cm、上端部幅26cm、軒幅61.5cm、下端部幅51.5cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りは、やや簡略化された蕨手の文様が彫られている。笠の底は塔身との接合部で深さ3cmほど掘り込まれており、印籠蓋のようになっている。

塔身は直方体で、高さ35cm、上端部幅42cm、下端部幅42cmである。笠との接合部で3cmほど組み合っており、見かけの高さは32.5cmである。四面の中央部には月輪の中に、薬研彫りの梵字が刻まれている。

基礎は上部二段で、高さ34cm、上端部幅48cm、下端部幅59.5cmである。正面には幅約20cm、高さ約19cmの大きさに凹状に段がほぼ正方形に作られ、その中央に表面が風化し文様は不明瞭になっているが、蓮座が彫り込まれている。

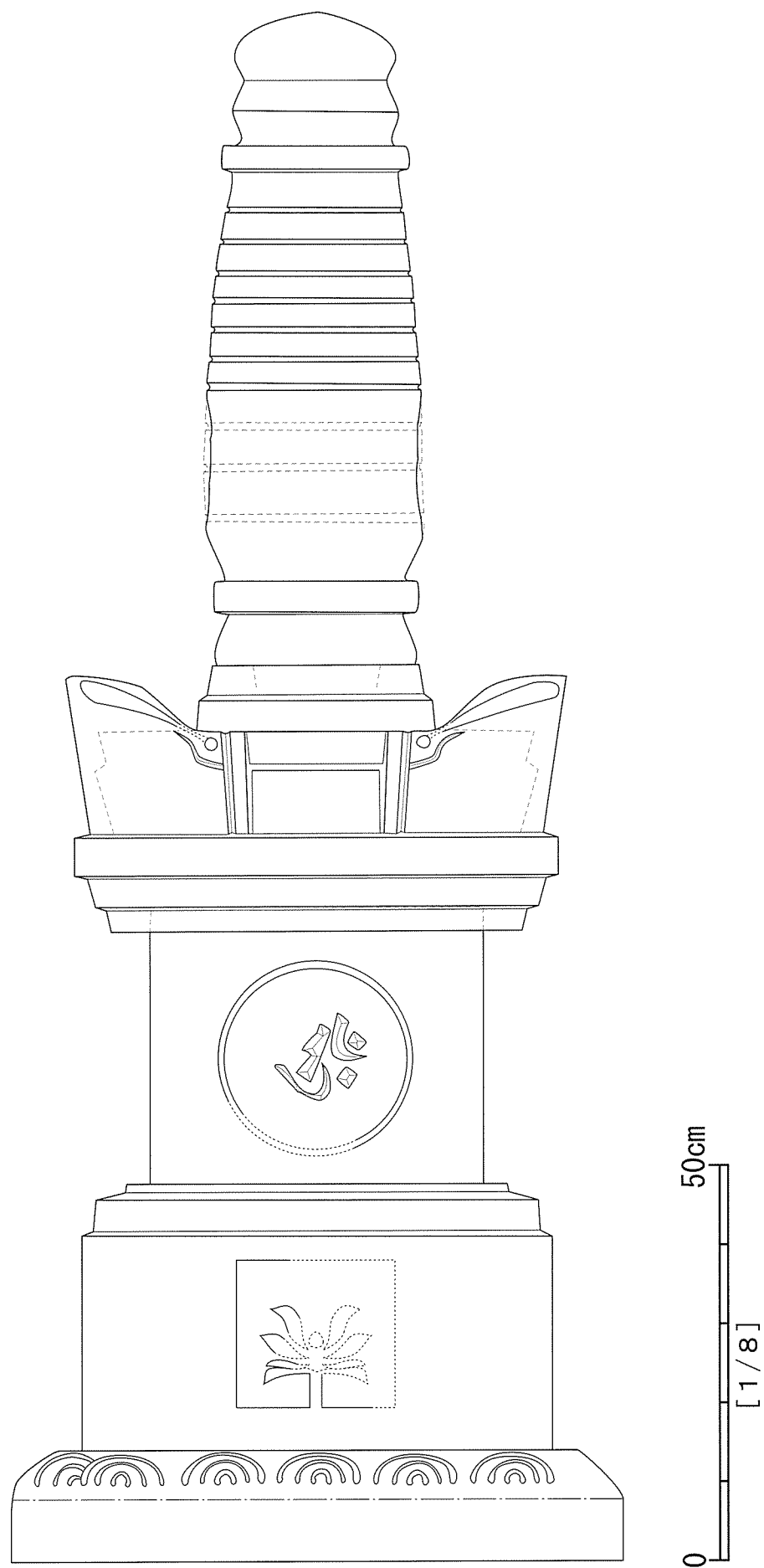


图11 伝堀尾忠氏宝篋印塔実測図

伝堀尾忠氏妻宝篋印塔〔6号石塔〕

堀尾泰晴夫妻石廟の西隣（正面左）に位置する2基の宝篋印塔のうち、西側（正面左側）のものである。春光院の記録により、堀尾忠氏妻のものとした。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎までの総高は121.5cm。全体的に風化が進んでいる。台石は花崗岩製で高さ14cm、幅55.5cmである。

相輪の高さは40cm、頂部はやや扁平な球状となっている。上部の請花は輪状に加工され、径18cmで、文様はない。九輪は風化が進んでいるが、狭い凹状の線で表され、最高部径16.5cm、最下部径19.5cmである。下部の請花も輪状に加工され、文様は認められない。伏鉢は高さ3.5cm、最大径20cmである。

笠の高さは25.5cm、上端部幅21.5cm、軒幅39cm、下端部幅34.5cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りには、やや簡略化された蕨手の文様が彫られている。

塔身は直方体で、高さ28.5cm、上端部幅30cm、下端部幅30cmで、中央部が少し膨らむ。風化が進んでいることもあるが、四面に梵字は確認できない。

基礎は上部二段で、高さ27.5cm、上端部幅33cm、下端部幅39cmである。

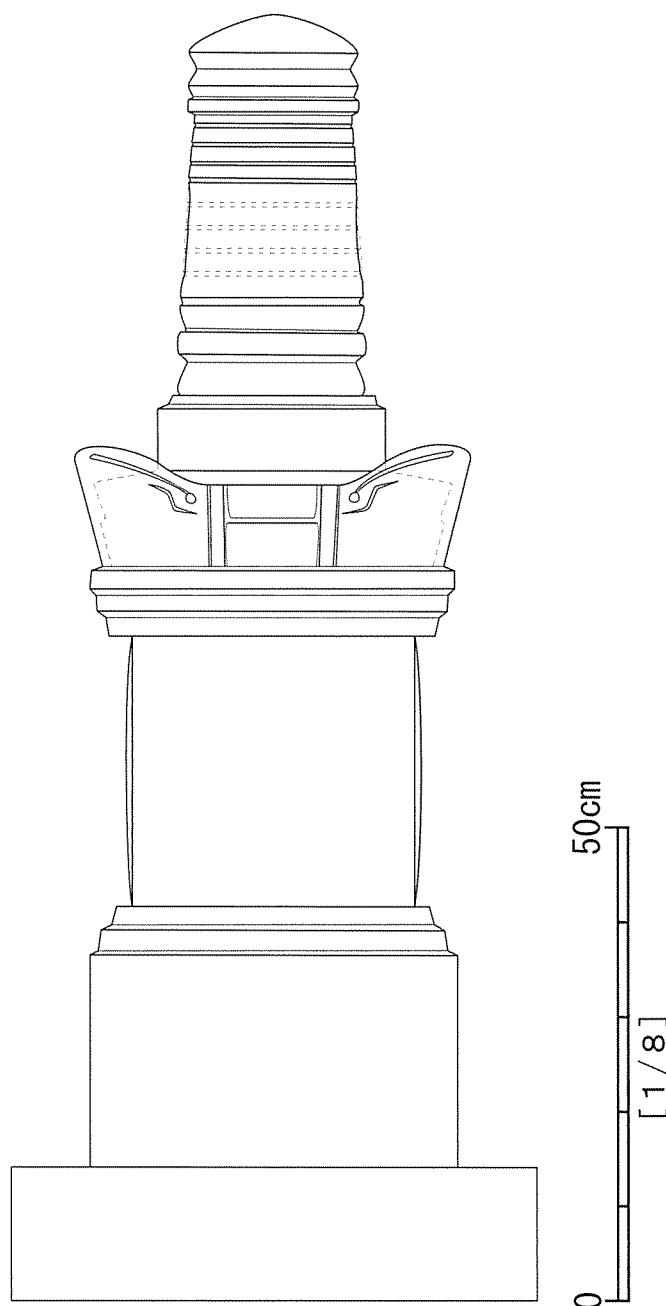


図12 伝堀尾忠氏妻宝篋印塔実測図

(4) 伝奥平家昌^{おくだいらえまさ}夫妻宝篋印塔

伝奥平家昌宝篋印塔〔7号石塔〕

伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔の左通路を挟んで東向きに位置する2基の宝篋印塔のうち、北側（正面右側）のものである。春光院の記録により、堀尾忠晴妻の父親で、徳川家康の孫にあたる奥平家昌のものとした。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎までの総高は117.5cm、全体的に風化が進んでいる。台石は花崗岩製で高さ15cm、幅55.5cmである。

相輪の高さは40cm、頂部はやや扁平な球状となっており、九輪は凹状の線で表されているが、風化が進んでおり、細部は分からない。

笠の高さは22.5cm、上端部幅18.5cm、軒幅35.5cm、下端部幅31.5cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。隅飾りには、やや簡略された蕨手の文様が彫られている。

塔身は直方体で、高さ26cm、上端部幅26.5cm、下端部幅26.5cmで、中央部が少し膨らむ。四面の中央部には、月輪の中に薬研彫りの梵字が刻まれている。

基礎は上部二段で、高さ29cm、上端部幅29.5cm、下端部幅34.5cmである。

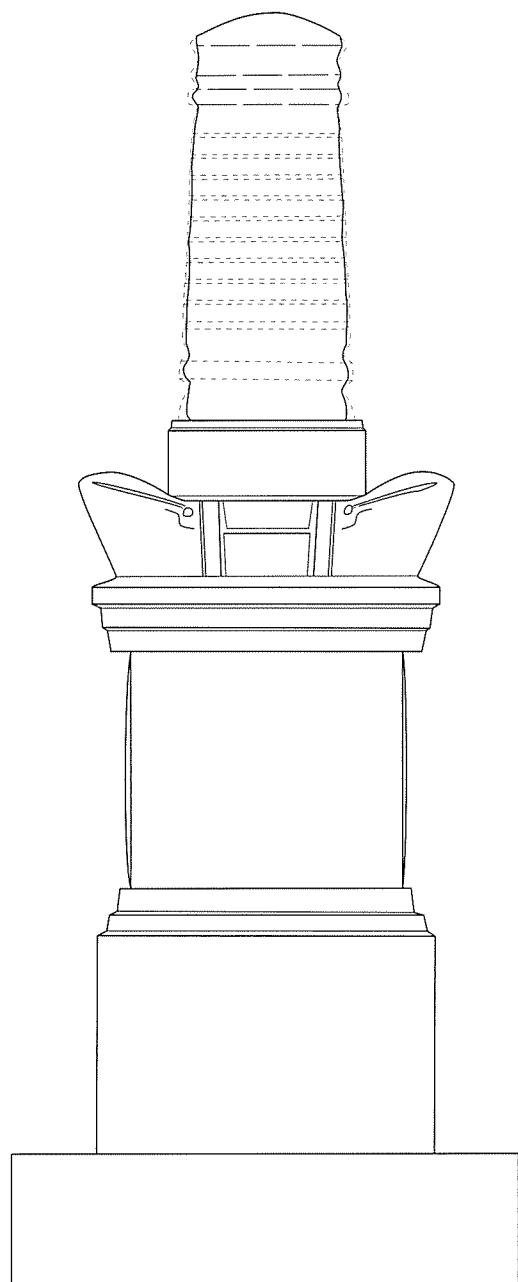


図13 伝奥平家昌妻宝篋印塔実測図

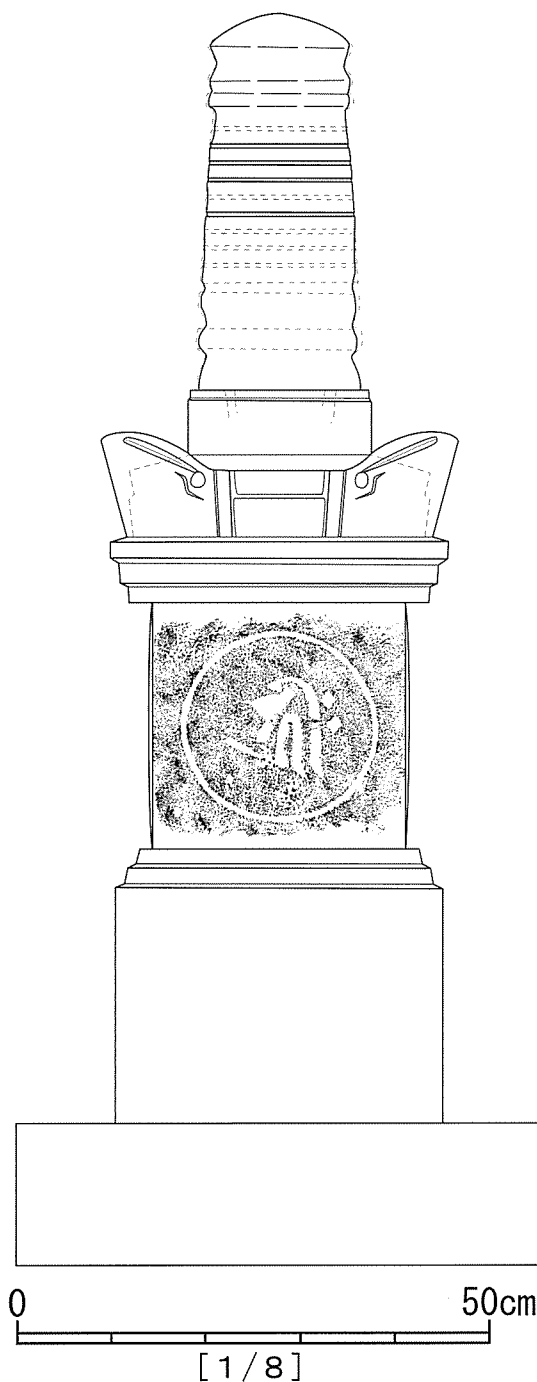


図14 奥平家昌宝篋印塔実測図

伝奥平家昌妻宝篋印塔〔8号石塔〕

伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔の左通路を挟んで東向きに位置する2基の宝篋印塔のうち、南側（正面左側）のものである。春光院の記録により、奥平家昌妻のものとした。来待石製の宝篋印塔で、相輪から基礎までの総高は120.5cm。全体的に風化が進んでいる。台石は花崗岩製で、高さ14cm、幅53.5cmである。

相輪の高さは43cm、頂部はやや扁平な球状となっているが、風化が進んでおり、細部は分からない。

笠の高さは24.5cm、上端部幅20cm、軒幅37cm、下端部幅32.5cmである。軒上、軒下とも段形は2段となり、隅飾り突起は直線で立ち上がり、少し外に開く。風化しているが、隅飾りには、やや簡略された蕨手の文様が彫られている。

塔身は直方体で、高さ25cm、上端部幅29cm、下端部幅29cmで、中央部が少し膨らむ。風化が進んでいることもあるが、四面に梵字は確認できない。

基礎は上部二段で、高さ28cm、上端部幅31cm、下端部幅36cmである。

(5) 伝^{のむらかわち}野々村河内妻（勝山：堀尾^{かげゆ}勘解由母）五輪塔〔9号石塔〕

伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔の北に並んだ石塔列の中に位置する五輪塔である。春光院の記録により、野々村河内妻（勝山：堀尾勘解由母）のものとした。来待石製の五輪塔で、空輪から地輪までの総高は165cmである。台石は来待石製で、高さ13cm、幅72cmである。

空風輪は一石で作られており、高さは48cm、頂部はやや扁平な球状となっている。風輪下部から空輪上部にかけての側面は直線的に広がっており、溝を掘り込むことで空輪と風輪を分けている。空輪は、上部径（空風輪の最大径）30cm、下部径27.5cm、風輪は、上部径25.5cm、下部径24cmである。

火輪は、高さ37cm、上端幅28.5cm、下端幅94.5cmである。軒の厚さは、中央で7cm、両端部で約14cmである。火輪上端から軒に下る斜面は上端から直線的に下り、軒先付近で大きくカーブする。

水輪は、高さ40cm、上端径40cm、下端径40cmである。水輪のちょうど中位で最大径48cmとなり、視覚的には細長い橢型となっている。表面は風化が進んでいるが、正面には「空」「風」「火」「水」「地」の文字が刻まれており、側面には斜め方向のノミ痕も認められる。

地輪は、高さ40cm、上端幅54cm、下端幅55cmで、正面の中央に蓮座が彫り込まれているが、表面が風化し、文様は不明瞭になっている。また、南側（正面左側）側面、北側（正面右側）側面に文字が刻まれているが、風化しており判読できない。

(6) 伝堀尾忠晴^{ほりおただはるむほうとう}無縫塔^(注3)〔10号石塔〕

伝堀尾忠晴無縫塔は来待石製の大型品で、塔身、台座、基礎からなり、幅146cm、高さ21cmの花崗岩製の台石に据えられている。塔身から基壇までの総高は229cm、台石を含めた総高は250cmである。

塔身は、高さ157cm、最大径90cmを測る縦長のもので、先端は丸味をおびる。請花は無い。

基礎は高さ60cm、幅120cmの直方体で、台石の上に据えられている。基礎の上面に高さ12cm、上端径75cmの花崗岩製の台座が作られている。

(7) 伝松村監物舟形石塔^{まつむらげんもつ} (注4) [11号石塔]

伝松村監物舟形石塔は来待石製で、塔身、台座、基礎からなり、幅135cm、高さ20cmの花崗岩製の台石に据えられている。塔身から基礎までの総高は196cm、台石を含めた総高は216cmで、大型石塔の暫定定義からするとやや小ぶりではある。

塔身は高さ130cm、最大径63cmを測る縦長のもので、先端は丸くなる。塔身の正面は概ね平面で、下端から15cm上から凹状となり、銘文等を記すための平坦面が作られており、その周囲には7～8cm程の縁がつく。風化が著しく、現在銘文は残っていないが、春光院に残る古写真（明治25年頃撮影）を見ると、平坦面に「口吉祥海雲」の文字が刻まれていたことが判読できる。なお、裏側は舟底形に丸くなっている。

基礎は幅106cm、高さ56cmの直方体で、台石の上に据えられている。基礎の上面には高さ10cm、上端60cmの台座が造り出しで作られている。

注1 『石を巡る歴史と文化 一笏谷石とその周辺一』福井県立博物館 1989

『福井県史』通史編4（近世2）福井県 1996

三井紀生『越前笏谷石 一北前船による移出・各地の遺品一』福井新聞社 2002

三井紀生『越前笏谷石 続編 一越前仏教文化の伝搬を担う一』福井新聞社 2006

「笏谷石」は、福井市足羽山の北西側山麓部の通称笏谷地区で採掘される良質の火山礫凝灰岩である。笏谷石の石造物には、いくつかの独自の装飾や形態をもつ荘厳形式が見られ、「越前式荘厳」と呼ばれている。笏谷石製石廟は、様々な荘厳手法を採用し、藩主や高位の人々の宝篋印塔や五輪塔を安置するための屋形として使用されている。

注2 今岡利江「石室を持つ宝篋印塔3例」『島根考古学会誌』23 2006

松江石造物研究会「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景」『来待ストーン研究』7 2006

堀尾泰晴夫妻石廟と来待石製大型石龕（石廟）との間には、石材を精巧に加工し組み合わせること、切妻造りなどの屋根をもつ平入りの屋形形であること、台石の上に石廟本体、屋根を載せ、内部には宝篋印塔が納めることなど、形態に強い類似性がある。また、泰晴夫妻石廟の前扉にも太陽を象徴する日輪が彫り込まれており、（もう一方の扉には、月が彫り込まれていた可能性がある）、殿様墓の1基（正面左）前扉にも太陽や月を象徴する円や三日月が彫られている。越前の石龕、石廟に見られる装飾の一つとして、正面に太陽や月を象徴する円や三日月が彫られるものがある（三井紀生『越前笏谷石 続編』2006）。さらに、外側壁面に卒塔婆形に配した四十九院を陰刻するなど、堀尾泰晴夫妻石廟と3箇所（4基）の来待石製大型石龕（石廟）には特徴的な類似性がある。堀尾氏の菩提寺に、笏谷石製石廟が存在することで、堀尾氏の上級家臣に採用されたと考えられる親子観音・堀尾民部（推定）石塔・殿様墓などの来待石製大型石龕（石廟）が、笏谷石製石廟をモデルにして製作された可能性は極めて高い。

なお、用語として使用する「石龕」「石廟」の区別については、今のところ明確な定義を持ち合わせてはいない。笏谷石製品については、仏像・経典を安置するものを「石龕」、墓を安置するものを「石廟」と便宜的に区分している例がある（三井紀生『越前笏谷石』2002）。来待石製品については、筆者らは従来、親子観音・堀尾民部（推定）石塔・殿様墓の堀尾氏の上級家臣に採用されたと考えられるものを、「来待石製大型石龕」とすることで（松江石造物研究会「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景」2006）、他の出雲地方で見られる「石龕」と区別してきた。今回、「来待石製大型石龕（石廟）」としたのは、笏谷石製の石廟との類似性を認識したためであるが、用語については今後整理していく必要がある。

注3 松江石造物研究会「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景」『来待ストーン研究』7 2006

注4 注3に同じ

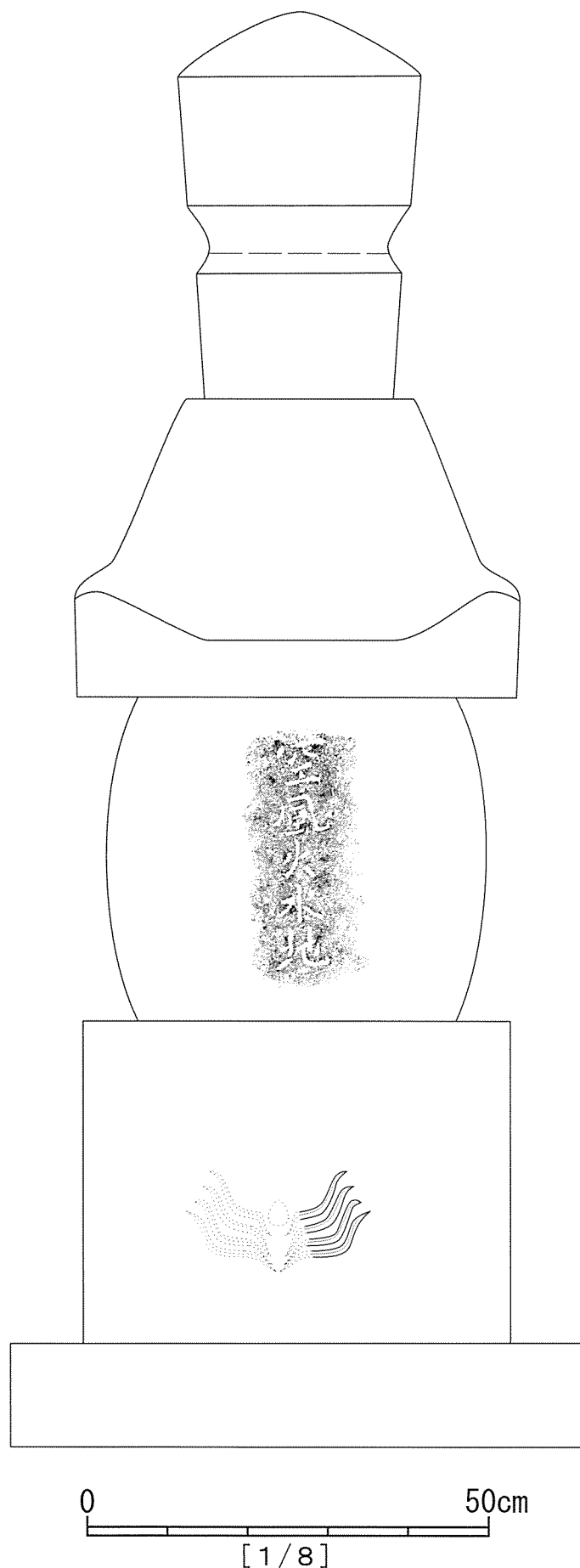


図15 伝野々村河内妻五輪塔実測図

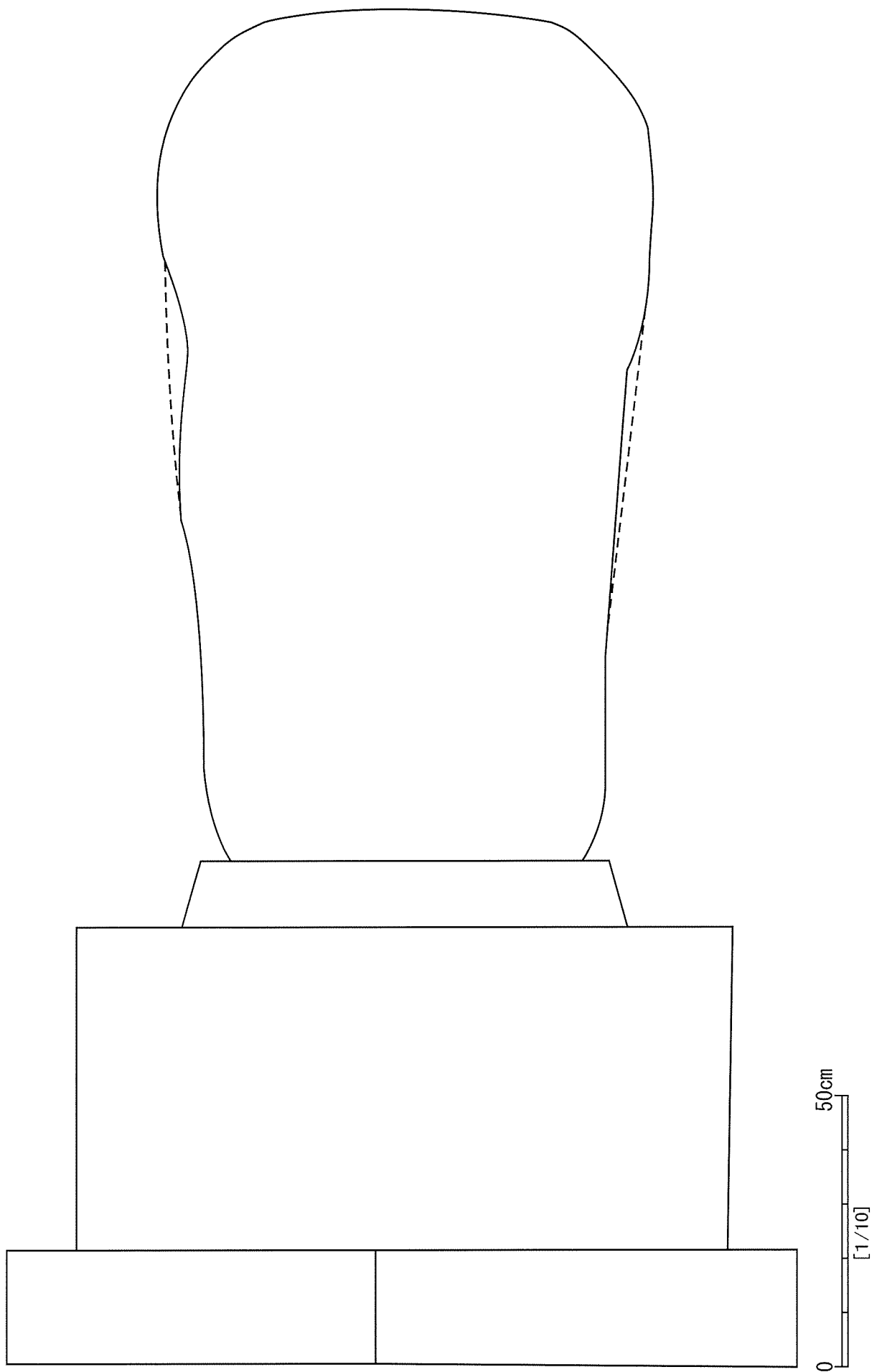


図16 伝堀尾忠晴無縫塔実測図

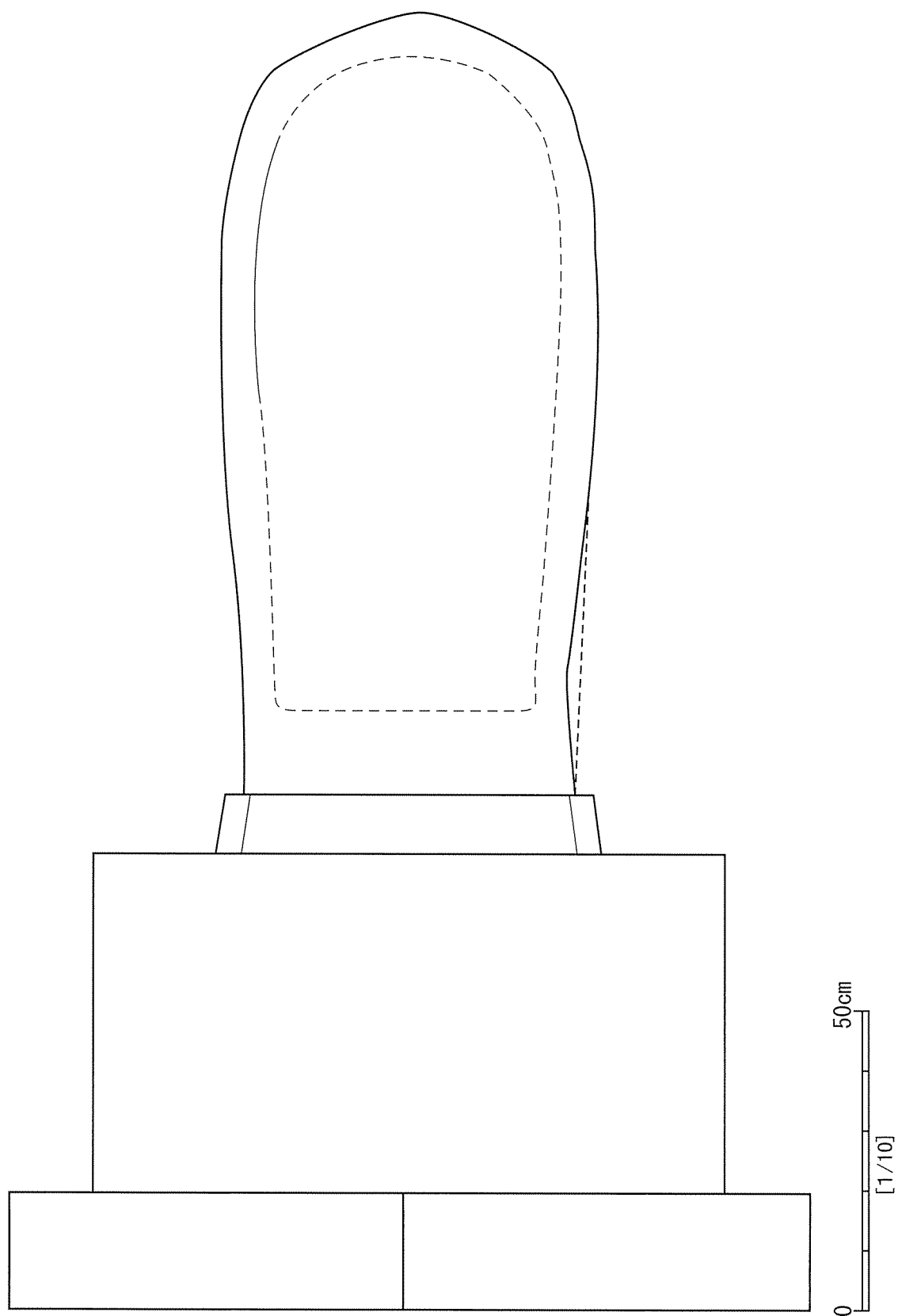


図17 伝松村監物舟形石塔実測図

4. 石塔の年代的考察と石廟の系譜について

(1) 石塔の時期について

春光院には、来待石製石塔として宝篋印塔10基、五輪塔1基、無縫塔1基、舟形石塔1基が存在する。これらの石塔の時期は、堀尾氏が出雲国を領していた17世紀代前半のものと考えられる。石塔の被葬者（被供養者）の比定は、寺伝に残るものもあるが、石塔に刻まれた銘文から人物を特定できるのは「天徳寺□□□」「世崇□□□」が刻まれた「天徳寺殿高菴世崇大居士」、すなわち堀尾泰晴と大姉の女偏が認められる泰晴妻のみで、他の石塔は銘文による人物の特定はできなかった。そこで、人物の没年、来待石製宝篋印塔の年代観に照らし合わせた各石塔の時期、人物名の整合性について考えてみたい。

春光院の堀尾氏関係者の没年と戒名を過去帳でみると(表2)、16世紀末に没したのは堀尾金助(吉晴の子とされる)と泰晴である。17世紀に入ると、忠氏、泰晴妻、吉晴、家昌妻、家昌と続く。その後、元和期には吉晴の娘の勝山殿と三刀屋殿、吉晴妻が、17世紀第2四半期の寛永期には忠氏妻、忠晴、松村監物となる。さらに、17世紀中頃の慶安期に堀尾忠晴妻が亡くなっている。

表2 堀尾氏関係者の戒名と没年一覧（春光院所蔵の過去帳、位牌、木像、石塔配置図より）

没 年	人 物 名	戒 名	位 牌	木 像	石塔配置図
1590 (天正18)	堀尾金助	俊巖院殿逸巖世俊大禪定門	●	●	—
1599 (慶長4)	堀尾泰晴	天徳寺殿高菴世崇大居士	●	●	●
1604 (慶長9)	堀尾忠氏	忠光院殿天岫世球大居士	●	●	●
1607 (慶長12)	堀尾泰晴室 (妻)	龍翔院殿芳嶽宗葩大姉	●	●	●
1611 (慶長16)	堀尾吉晴	法雲院殿松庭世栢大居士	●	●	●
1611 (慶長16)	奥平家昌室 (妻)	法明院殿慧光正圓大禪定尼	●	—	●
1614 (慶長19)	奥平家昌	六通院殿天眼道高大居士	●	—	●
1618 (元和4)	女 (娘) 勝山殿	靈照院殿高月宗松大禪定尼	●	●	●
1618 (元和4)	女 (娘) 三刀屋殿	清涼院殿金臺宗蓮大禪定尼	●	●	—
1619 (元和5)	堀尾吉晴室 (妻)	昌徳院殿俊芳宗英大姉	●	●	●
1627 (寛永4)	堀尾忠氏室 (妻)	長松院殿真諦紹聖大姉	●	●	●
1633 (寛永10)	堀尾忠晴	圓成院殿高賢世肖大居士	●	●	●
1633 (寛永10)	松村監物	大恕玄忠居士	●	—	●
1650 (慶安3)	堀尾忠晴室 (妻)	雲松院殿長天正久尼大姉	●	●	—

石塔について、来待石製石塔の研究より明らかになっている年代観に照らし合わせてみると^(注1)、最も古い要素をもつ石塔は伝堀尾吉晴妻宝篋印塔（4号石塔）である。これは、九輪を欠くが、笠の形状と基礎に蓮座を有するなど、親子観音、堀尾民部（推定）石塔内宝篋印塔に類似し、慶長期のものと考えられるが、堀尾吉晴妻は元和5年（1619）に没しているため、石塔の年代観とは整合しない。

次に、古い年代観が与えられる石塔は、石廟内の泰晴宝篋印塔（1号石塔）と泰晴妻宝篋印塔（2号石塔）である。相輪の形状、笠の段丘の表現、隅飾りの形状などにより、親子観音と同じ時期と考えられる。泰晴石塔は石廟内に存在するために銘が残っており、人物を確認できる唯一のものである。泰晴妻宝篋印塔（2号石塔）には、大姉の女偏が認められることから、この石塔が女性のもの（泰晴妻）と特定できる。

泰晴夫妻宝篋印塔（1、2号石塔）とほぼ同じ時期のものに、伝堀尾忠氏妻宝篋印塔（5号石塔）がある。この伝堀尾忠氏宝篋印塔は、春光院に所在する来待石製宝篋印塔の中では最大のものである。笠の全体的形状や隅飾りがやや外開きで、中央寄りの部分では平坦面があることや、基礎に蓮座をもつことなどにより、親子観音から伝堀尾民部（推定）石塔内宝篋印塔の時期と考えられる。年代観からみると、慶長9年（1604）に没した忠氏のものとする整合性はとれている。

その次に古い年代観が与えられる石塔としては、伝堀尾忠氏妻宝篋印塔（6号石塔）、伝堀尾吉晴妻宝篋印塔（3号石塔）がある。笠の段形の表現が荒く、隅飾りが横長になり、中央よりの部分では平坦面があることから、伝堀尾民部（推定）石塔内宝篋印塔以降のものである。

その次に、寛永期以降の年代観をもつ石塔は伝奥平家昌宝篋印塔（7号石塔）で、最も新しいものが伝奥平家昌妻宝篋印塔（8号石塔）である。笠の段形表現や隅飾りの形状から寛永期以降の17世紀中頃と推定される。この石塔の年代観と奥平家昌の没年（慶長19年 [1614]）とはやや年代差がある。

なお、今日残されている堀尾一族の木像として、春光院所蔵の9体（泰晴夫妻、吉晴夫妻、忠氏夫妻、金助、女2体）、圓成寺（松江市）所蔵の2体（忠晴夫妻）が存在する。これらの像は、吉晴を中心とした堀尾家嫡流の人物のものである。この木像と人物の比定が正しいものとするれば、この木像比定者の石塔も同じように春光院に存在した可能性が考えられる。しかし、春光院に伝えられている石塔配置図と墓籍表には、金助と忠晴室（妻）および三刀屋殿の記載はない。想像の域を出ないが、石塔運搬或いは改葬などの折に、人物の一部に何らかの理由で入れ替えが生じた可能性も考えられる。

来待石製大型石塔である伝堀尾忠晴無縫塔（10号石塔）、伝松村監物舟形石塔（11号石塔）^{（注2）}については、来待石製石塔としては特殊なものであり、明確な編年観を持ち合わせていないが、両名が亡くなった寛永10年（1633）以降の17世紀第2四半期の内で造られた可能性をもつ。また、石塔の配置でも分かるように、墓地の中でも中心に置かれ、灯籠をも備えた伝堀尾忠晴無縫塔（10号石塔）が重要視されていたことは推察できる。いずれにせよ、堀尾氏に関わる大型石塔であり、多大な労力をかけて出雲より京都に搬入したものと言えよう。

（2）笏谷石製石廟と来待石製大型石龕（石廟）について

笏谷石の石塔には、いくつかの独自の装飾や形態をもつ莊嚴型式が見られ、「越前式莊嚴」と呼ばれている^{（注3）}。笏谷石製石廟は、様々な莊嚴手法を採用し、藩主や高位の人々の宝篋印塔や五輪塔を安置するための屋形として使用され、京都、近江、能登、越中、越後、紀州、蝦夷松前などに移出されている。代表的なものとして、高野山の結城（松平）秀康の石廟、石川県七尾市長齢寺の前田利家・利長の石廟、金沢市野田山の前田利家の子女と家臣の石廟、富山県高岡市瑞龍寺の前田利家の石廟、滋賀県米原市清滝寺徳源院の京極高次の石廟などが知られている。特に、七尾市長齢寺の前田利家・利長の石廟は、石材を精巧に加工し組み合わせるもので、切妻造りの屋根をもつ平入りの屋形形で、台石の上に石廟本体、屋根を載せ、正面には観音開きの扉が付き、扉下の切石羽目板には縦連子と格狭間を組み合わせた莊嚴が施されているなど、堀尾泰晴石廟と極めて類似する。内部には前田利家と利長を供養するための2基の笏谷石製の宝篋印塔が納められており、宝篋印塔には利家・利長の法名と没年が刻まれている^{（注4）}。利長の没年が慶長19年（1614）であることから、

この石廟も利長の没年の慶長期頃に作成されたものと考えられる。笏谷石製石廟の多くは17世紀初めから中頃にかけて造立されており、この石廟のスタイルは越前地方の神社などに見られる石龕^{せきがん}が起源と考えられている。また、越前の石龕、石廟に見られる装飾の一つとして、正面に太陽や月を象徴する円や三日月が彫られるものがある^(注5)。

ところで、今回調査した堀尾泰晴夫妻石廟と、親子観音〔安来市広瀬町〕、堀尾民部（推定）石塔〔松江市玉湯町〕、殿様墓〔雲南市三刀屋町：石龕（石廟）が左右2基並ぶ〕^(注6)などの来待石製大型石龕（石廟）との間にはいくつかの類似性があり、石材を精巧に加工し組み合わせていること、平入りの屋形形であること、台石の上に本体、屋根を据え、内部には宝篋印塔を納めることなど、形態的な共通性がある。また、泰晴夫妻石廟の前扉には太陽を象徴する日輪が彫り込まれているが（もう一方の扉には月が彫り込まれていた可能性がある）、殿様墓の1基（正面左）の前扉にも太陽や月を象徴する円や三日月が彫り抜かれている。さらに、外側壁面には卒塔婆形に配した四十九院を陰刻しており、堀尾泰晴夫妻石廟と3箇所（4基）の来待石製大型石龕（石廟）では宗教観を共有していたと考えられる。堀尾氏の菩提寺に笏谷石製石廟が存在することで、堀尾氏の御仕置^{しおき}等の上級家臣に採用されたと考えられる来待石製大型石龕（石廟）が、笏谷石製石廟をモデルにして製作された可能性は高く、来待石の採石・加工技術の展開に笏谷石の工人が何らかの形で関わっていた可能性も考えられる。

注1 松江石造物研究会「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景」『来待ストーン研究』7 2006

注2 注1に同じ

注3 『石を巡る歴史と文化 一笏谷石とその周辺一』福井県立博物館 1989
川勝政太郎『新装版 日本石造美術辞典』東京堂出版 1998 ほか

注4 三井紀生「越前笏谷石 一北前船による移出・各地の遺品一」福井新聞社 2002

注5 三井紀生「越前笏谷石 続編 一越前仏教文化の伝搬を担う一」福井新聞社 2006

注6 西尾克己ほか「玉湯・報恩寺の石塔群」『来待ストーン研究』6 2005

樋口英行「来待石製石龕の成立と展開」『来待ストーン研究』6 2005

今岡利江「石室を持つ宝篋印塔3例」『島根考古学会誌』23 2006

松江石造物研究会「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景」『来待ストーン研究』7 2006

5. お わ り に

堀尾氏の菩提寺である京都・妙心寺春光院には、境内の一角に堀尾一族を祀る「御霊屋」があり、その裏には堀尾泰晴夫妻、吉晴夫妻、忠氏夫妻、忠晴、奥平家昌夫妻、野々村河内妻、松村監物のものと伝えられる宝篋印塔、五輪塔、無縫塔、舟形石塔など、来待石製の石塔が並んでいる。

宝篋印塔・五輪塔については、形態的には出雲地方で見られる17世紀前半の来待石製宝篋印塔・五輪塔であり、いずれも出雲から京都まで運んだものである。伝堀尾忠晴無縫塔と伝松村監物舟形石塔についても、来待石製大型石塔が出現する^(注1)17世紀前半のものと考えられ、同じく出雲から運んだものである。

来待石製石塔の大半が春光院の資料により人物名比定がなされていたことから、人物の特定に言及できたのは大きな成果であった。しかし、石塔に残された銘文より、人物を特定できたのは堀尾泰晴夫妻宝篋印塔のみで、来待石石塔の年代観に照らし合わせると、一部の石塔に整合性のとれな

いものも存在した。人物の特定については堀尾一族の木像調査等と併せ、今後検討していく必要がある。

今回の調査で、堀尾泰晴夫妻の石廟が、加賀藩主前田家一族など、大名家の人々の宝篋印塔や五輪塔を安置するための屋形として使用された笏谷石製石廟であることが明らかになった。また、堀尾泰晴夫妻石廟と、堀尾氏の上級家臣に採用されたと考えられる親子観音・堀尾民部（推定）石塔・殿様墓などの来待石製大型石龕（石廟）にはいくつもの共通性が認められ、京都の地ではあるが、堀尾氏の菩提寺に笏谷石製石廟が存在することで、出雲にある来待石製大型石龕（石廟）が、笏谷石製石廟をモデルにして製作された可能性を指摘するに至った。笏谷石製石廟と来待石製大型石龕（石廟）の系譜と歴史的背景、さらには、採石・加工・運搬等の石造技術の伝播・展開などについては、引き続き今後の重要な検討課題と言えよう。

なお、春光院三時回向（本書収録）により、「桂岩院殿祥雲世端大居士 慶長十三十二月五日」という戒名・没年の記録が確認できたことで、「慶長十三年」「十二月五」の紀年銘と、「桂ヶ口院殿祥雲世口大居士」の戒名を刻む^{（注1）}富田城跡〔安来市広瀬町〕山麓にある親子観音内宝篋印塔が、堀尾勘解由のものであると特定できた。「堀尾古記」^{（注2）}には、慶長13年「堀尾勘解由果ル 極（12）月五日京ニテ」と記されているが、京のどこで、どのような果て方だったかは伝えていない。しかし、亡骸は堀尾家菩提所春光院に葬られた可能性は高い。

注1 松江石造物研究会「来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景」『来待ストーン研究』7 2006

注2 「堀尾古記」『新修島根県史』史料編2 島根県 1965

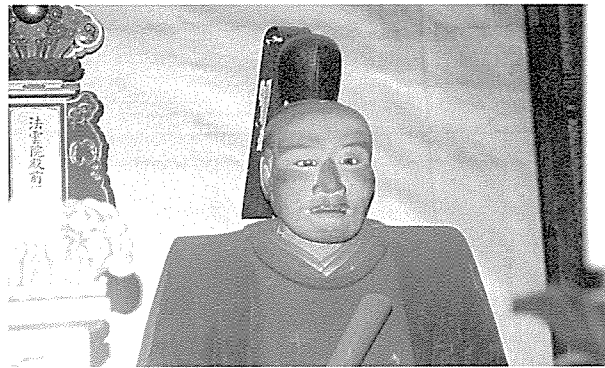
[本稿は、平成18年3月25日、26日、同年11月4日、5日の4日間にわたり、京都・妙心寺春光院（京都府右京区花園妙心寺町）において行った歴史史料調査のうち、来待石製石塔を中心とする石造物調査の成果を報告するものである。石造物調査については、岡崎雄二郎、西尾克己、稲田 信、樋口英行があたり、本稿の執筆も分担した。また、図面の浄書は樋口英行が行った。なお、本稿所収の春光院の概説「1. 春光院について」及び堀尾泰晴夫妻石廟の外側壁面に彫られた四十九院の解説表「堀尾泰晴夫妻石廟外壁卒塔婆内四十九院判読表」は、佐々木倫朗、松原祥子による。]

謝 辞

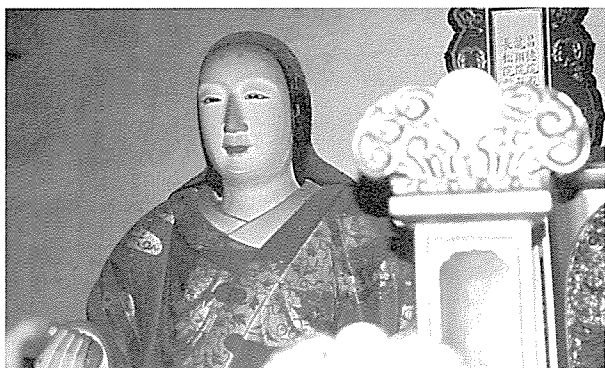
本稿を執筆するにあたり、春光院住職川上史朗師には、調査に訪れた私たちに対し多大な御便宜と御協力をいただきました。記して感謝申し上げます。



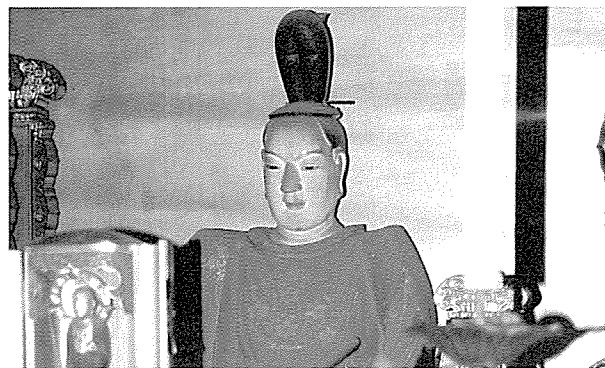
堀尾吉晴夫妻木像



堀尾吉晴木像



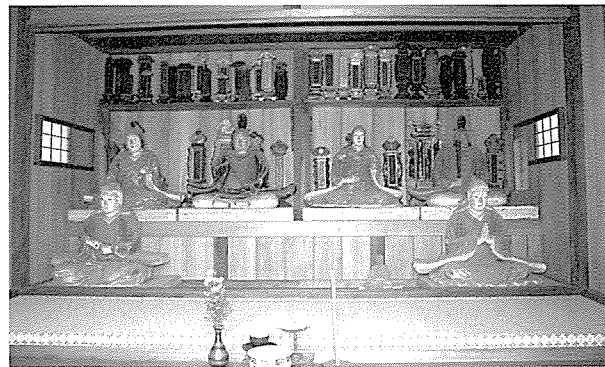
堀尾吉晴妻木像



堀尾金助木像



春光院御霊屋（正面）



春光院御霊屋（内部）



御霊屋裏墓域



堀尾泰晴夫妻石廟正面（開扉）



堀尾泰晴夫妻石廟正面（閉扉）



堀尾泰晴夫妻石廟前
扉（左：表、右：裏）



堀尾泰晴夫妻石廟裏



堀尾泰晴夫妻石廟外壁
（卒塔婆に配した四十九院を刻む）



堀尾泰晴宝篋印塔基礎（天徳寺の文字を刻む）



伝堀尾吉晴夫妻宝篋印塔（左：妻、右：吉晴）



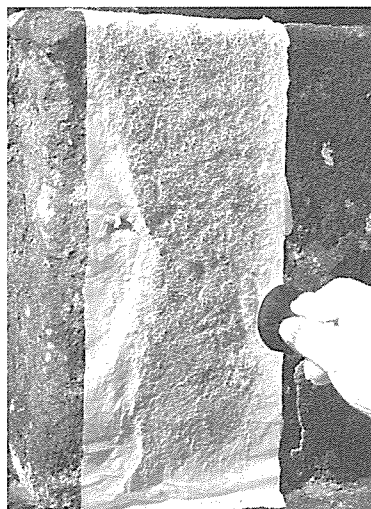
伝奥平家昌夫妻宝篋印塔（左：妻、右：家昌）



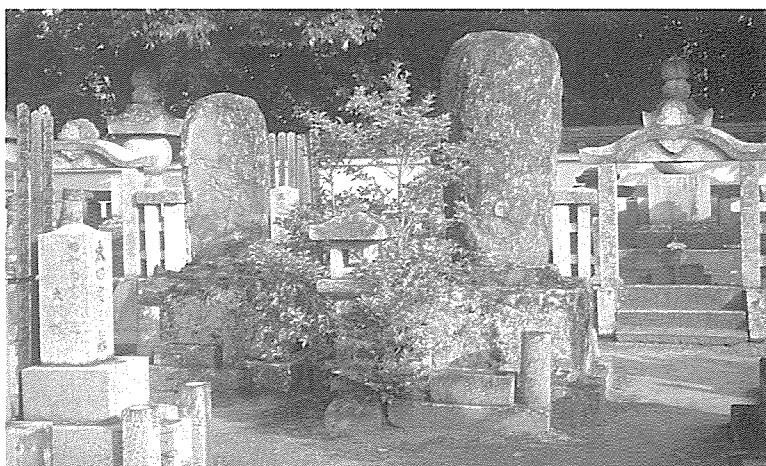
伝堀尾忠氏夫妻宝篋印塔（左：妻、右：忠氏）



伝野々村河内妻五輪塔



伝野々村河内妻五輪塔
地輪刻字採拓風景



伝松村監物舟形石塔（左）、伝堀尾忠晴無縫塔（右）



伝松村監物舟形石塔



伝堀尾忠晴無縫塔



12号石塔（伝奥平家昌宝篋印塔横）



13号石塔（伝野々村河内妻五輪塔裏）



長齡寺前田利家・利長石廟（石川県七尾市）



親子観音（島根県安来市広瀬町）



堀尾民部（推定）石塔（島根県松江市玉湯町）



殿様墓（島根県雲南市三刀屋町）